

極上エリートは溺愛が大好き

目次

極上エリートは溺愛がお好き

5

番外編 運命の出会い

265

極上エリートは溺愛が好き

1 素顔は秘密の意外な出会い

(ここで合ってる、よね?)

手元のスマホが示した位置情報を再チェックして、紗奈は小洒落たデザインの暖簾を思い切って潜った。柔らかな照明に照らされた居酒屋に、足を一步踏み入れてみる。

「あ、こつち、こつち!」

(よかった、合ってた……)

妹の親友の優香は笑いながら、手を振って招き、横の席を指差した。見ると、隣の席が紗奈のためにはわざわざ確保してある。

それを見て覚悟を決めた紗奈は、そちらに向かってゆつくりと歩み始めた。

客の間を、すみません、と言いながら進む店は、さすがに評判がいいだけはある。木の天井からはお洒落でレトロなライトがぶら下がり、大勢の客が照らされていた。陽気な客があちこちで、笑い声をあげている。

紗奈の向かう先でも、もうすでに結構な数の若い男女が楽しそうに談笑中だ。

そこへ、紗奈はドキドキしたまま近づいていった。

「こちらは、えっと、杉野さんです」

「よろしく……です」

幹事の女性に紹介されると、すかさず条件反射でニコリと笑えた。

だがさすがに緊張気味だからか、声が少し掠れる。それでも今すぐ逃げ出したい胸の内は心の底に、ギューウと押し込んだ。そして自分のために空けてあった席に、丁寧な礼をしてから腰掛ける。

(ふう、久々に緊張するわ、これ……)

左右の席には、若い女性たちがずらりと並んでいた。

そんな、どう見ても社会人になりたての出席者に囲まれていても、紗奈はまわりにしっかりと溶け込んでいる。

それどころか、今日の飲み会参加者の中では、一番若く見えてしまっていた。

「結奈、何飲む?」

「じゃあビールで」

紗奈の名前はもちろん、優香に呼ばれた「結奈」ではない。

フルネームは杉野紗奈。工作機械メーカー、QNCテックス社の秘書室に勤務してもう五年になる。

つまり、紗奈は新卒どころか、今年二十八歳になるのである。

けれど今夜はわけあって、紗奈は今年新卒である妹の結奈のフリをして、飲み会に参加している。

「本当にごめんなさい、ちよっと道に迷っちゃって……」

紗奈は努めて自然に振る舞い、周りに笑いかけながらも、心の中で諦めの溜息をついた。

（はあ、何やってんだろ、私……今日こそはドラマの続き、観ようと思ってたのに……）

予定では、今夜も家でまったりドラマを観る、お一人様時間を満喫するはずだった。それがなぜだか今現在、都内の居酒屋でピカピカの新卒お嬢様たちに囲まれている……

「唐揚げ追加、頼むね！」

「こっち！ ビール一本足りないよ」

などと元気な声が店内を飛び交い、狭い通路を店の人たちがせわしなく通り過ぎていく。

そんな中、熱気のある若い男女に取り囲まれつつ、茶色い木椅子にチョコンと座っていると、どうしようもなく居心地が悪くなってくる。

それもそのはず、今日の飲み会の趣旨は新しく社会人になった妹の同級生、某お嬢様大学出身の女性たちと社会人の男性たちの集まり——つまりは飲み会とは名目で、要は合コンであった。

普段の紗奈は、会社の付き合い以外はこんなところに出向かない。勤務中はともかく、私生活は割とのんびりである紗奈は、飲みに出ることなど滅多になかったのだ。

そしてただ今彼氏イナイ歴をドンドン更新中なのだが、三十手前のこの歳でもいたって気にしていなかった。だがそんな紗奈と違って、妹の結奈は切実に恋人を欲しがっており、今日の飲み会も、昨日から張り切って念入りに支度をしていらしたらしい。

昼頃、電話がかかって来た時には、熱を出して寝込んでいた結奈に一時間以上も愚痴られてしまった……

『……というわけでお姉ちゃん、ちょっと私の振りして代わりに合コンに出てきて。今日もどうせ暇よね？』

「は？ いや、ちょっと、今日の飲み会って同級生なんですよ？ 出てきて……いくら何でも無理がない？」

『何言ってるの、ノーマイクのお姉ちゃんなら私とクリソツだし、大丈夫に決まってるでしょ。知らない人ばかりだし、優香にフォローしてもらえば誰も気が付かないわよ』

「だからってなぜに、私が？」

『今日のメンバーは、ツテでいいトコの人ばかりが集まっているのよ。出会いの場は大切にしなきゃ。でもってついでにカッコいい人がいたら、名刺とか携番とかゲットしてきて。お・ね・が・い！』

「えええ……？」

結奈がこの話を持ちかけてきた時は、そんな無茶を優等生の優香が承知するわけがない、と思った。だからうっかり『分かった、優香ちゃんが賛成してくれるなら、出てあげてもいいよ』と返事をしてしまったのだ。

ところが優香から返ってきたのは、まさに想定外の返答だった。

日程調整が大変だった今日のメンバーに、欠員は出せないから……と、優香の真面目な性格が思いつ切り裏目に出た。『お姉さん、どんと任せてっ！』とあつさりフォロー役を引き受けられてしまったのだ。

そして悲しいことに、妹に指摘された通り、紗奈は思いつ切りベビーフェイスだ。

少し長めの髪は、今は妹に似せてふんわり緩くウェーブをつけてはいるが、本当はストレートで幼く見えるし、どことなく甘い顔立ちは、若々しい、と言えば聞こえはいいが、やはりこれも実際年齢より幼く見える。

おまけに体形も小柄で、ヒールのあるミュールやパンプスを履いていないと通勤ラッシュ時などは人に埋もれてしまう。

紗奈自身は、ここに来るまでも電車に揺られながら、いやいくら何でも新卒は無理があるんじゃないの？　と思いつながら出向いたのだが……

(……なんで誰も気が付かないわけ？　私って化粧してないと、そんなに若く見えるのかな……) 周りの自分よりうんと若い女性たちを何気なく見渡すと、やはり場違いな気がする。

(でも……気にしない、気にしない。えっと、さすが今話題の居酒屋ね、内装も凝ってるし)

ここまで来たからには、と覚悟を決め、無理やり気持ちを持ち直してみた。すると、目の前のテーブルに美味しそうな料理の数々が、次々と運ばれてくるではないか。旨味のある肉汁がジュワと焼ける匂いや、お酒の芳醇な香りなど、食欲をそえられる音や香りが、こちらまでフワーンと漂ってくる。

(……ここはせめて、しっかりと食べてから帰ろうっと。こんな飲み屋街までわざわざ出向いた労力は、無駄にはできないわ……)

紗奈は、ようし、と周りに合わせてお箸を取り、突き出しを味わった。おいしくい、と見た目を裏切らないその味に目を輝かせる。とりあえずは目の前の料理を楽しむことに決めた。

しばらくしてお腹が美味しいもので満たされてくると、最初はコチコチだった緊張感がかなり薄れる。何とはなしに壁に陳列するお酒を眺めていたら、隣の優香に、お姉さん、ほら、グラスグラス、と目で合図されてしまった。

え？　と意識を現実に戻せば、いつの間にか向かいの男性がこちらに笑いかけている。そしてその手には、ビールの瓶が握られていた。

あ、いつけない、と慌てて向かいの男性にグラスを差し出す。

「それじゃあ、新しい出会いに、カンパニー」

「カンパニー」

「カ、カンパニー……」

(コンパなんて滅多に出なかつたけど、こんなノリなの……)

合わせるのに必死で、背中冷や汗が流れる。

でも、自分は一応れつきとした大人の女性なのだ。社会人五年目スキルをフルに発揮して、ニッコリ笑って周りに合わせる。

(はあく、妹よ、急に熱が出たのは可哀想だけでも……)

人数合わせに引つ張ってこられた姉は、もつと悲惨な心境だ……

そうは思いながらも、ようやく気持ちに余裕が出てくる。遅ればせながら、今度はテーブルの向かいに並んだ男性陣をチェックしてみた。みんな結構、良さそうな人たちだなあ、と今日の集まりのレベルの高さにひたすら感心する。

だが、向かいの席を順々に追っていた視線は、一人の男性の顔まで来ると、ピタ、と止まった。  
（……って、あれ？）

紗奈のガラスの心臓の鼓動が、大きくドキンと跳ね上がった。  
テーブルの一番奥に、見覚えのある顔を発見したのだ。

（うそっ！ あれってサイファコンマ社の方じゃ……？ 名前は確か、羽泉さん、だっけ……？）

紗奈は少し遅れて来たために紹介はされていないが、間違いない。

艶々のサラッとした黒髪に、涼しげな切れ長の目、端麗で精悍なイケメン顔。

服の上からでも分かる、均整の取れた逞しくすらつとした体躯と、堂々としたその態度は威圧的なほど迫力がある。

つい先週、紗奈の会社のIT会議に出席していた彼は、顔のいい男が少し苦手な紗奈が珍しく気に入った取引相手だった。彼は愛想はないものの、ものすごく頭のいい人だ。紗奈が羽泉をしつかりと覚えていたのも、会議中の彼の姿がひどく印象的だったからだだった。

（確か、エンジニアチーフ？ だっただっけ？）

それは紗奈の会社で会議前に提出された、専門用語だらけの新システム導入報告書がきっかけだった。システム部の部長を呼んで説明させても要領を得ないことに閉口した社長から、『次の会議には秘書室の誰かが出席して、要点を報告してくれ』と要望された。

それに応えるべく白羽の矢が立ったのが、紗奈だったのだ。

そういうわけで先週は、チンブンカンブンの分野の会議に放り込まれてしまった。

そして当日、資料と出席者たちを必死で照らし合わせて臨んだ会議は、思いもよらずスムーズに進んだ。

それは、テーブルの向かいで黙ってグラスを傾けている男、羽泉の力量によるものだった。

彼は、新システム導入の指揮を取るサイファコンマ社の席で、白熱する会議の要所所で発言し、会議を見事に動かしていた。気が付けば出席者全員が彼の言葉に耳を傾けており、議題がみるみるまとまっていた。それゆえ紗奈を大いに驚かせたのだ。

『こんな若いのに、すごい！ うちの部長、タジタジじゃない？』

彼の年齢はどう見積もっても三十前後。会議出席者の中では若手にもかかわらず堂々と中央の席に座っていた。

そんな彼も今日はプライベートだからか、前髪をサラッと自然に下ろしてある。グラスを持つ手の爪は綺麗に切っており、その男らしい骨張った長い指に、思わずドキッとしてしまった。

心臓はそのまま、ドキ、ドキ、ドキと少し速めに鳴り出す。

（落ち着いて、紗奈、幸いあつちはまだ私に気付いていない……と思いたい……）

世間って狭過ぎると、目をチラチラやっつてしまいうるのを、無理矢理とどめる。

そして何気なく優香たちとの会話に混じって、そちらを意識しないように努めてみるのだが……

——こんな賑やかな場なのに無愛想なのは変わらないんだと、いつの間にか目の端に映る彼に、どうしようもなく惹かれてしまう。

そのうち、向かいの女性が恐る恐る彼に話しかけた。だが彼は、相変わず愛想笑いもせず、簡

潔な返事を淡々としているようだった。

見るからに緊張している若い女性は、そんな彼の態度に戸惑っている。

今夜の彼は先日のスーツ姿とはガラッと変わり、黒いジーンズにラフなシャツ姿だ。袖をまくったシャツからは健康そうな逞しい腕が覗いていた。

居酒屋の狭いテーブルの下で窮屈そうに手足を伸ばしているその姿は欠伸こそしないものの、時々遠くを見る目が、早くこんなところから解放されたいと語っているようだった。

どうやら彼は、合コンに興味はないようだ。

先程から、隣の茶髪の友人らしき人と熱心に話し込んでいる。

二人ともすこぶるいい男なので極めて目立って、そっだけ異世界のようだ。

(やっぱり、私に気付いてない……よね?)

新卒に混じって出席している自分に気付かれたとして、その後、会社でまた顔を合わせるのは勘弁して欲しい……

飲み会がくだけた雰囲気になってきたのをこれ幸いと、紗奈はわざと席を何度か移動した。

奥の席から動かない彼らから、さり気なく遠ざかっていく。

(もうそろそろ、抜けてもいいかな……)

これ以上の長居は、ガラスの心臓に悪過ぎる……

みんなほろ酔いになってきた頃、優香にそっと「帰るね」と断って、トイレに行くフリをして店の外に出た。

(ハア、どつと疲れた。さあ、妹よ、義理は果たしたわ。姉はここでおさらばよ!)

解放感に浮かれて夜の飲み屋街に漂う美味しそうな匂いを、スーと吸い込むと、最寄駅の方角にクルッと身体を向ける。

「帰るのか？ 駅まで送ろう」

「え？」

低い声が、耳のすぐ側で聞こえたので驚いた。あ、とうっかり身体のバランスを崩しそうになる。途端に、ガシッと逞しい腕に後ろから肩を支えられ、いつの間にか広い胸に寄りかかっていた。

「っ、ごめんなさい」

「いい。駅はこっちだな」

聞き覚えのある深みのある声と、紗奈好みの惚れ惚れする男らしい横顔が、鮮やかな電灯に照らされて浮かび上がった。すると胸がドキンと跳ねて、顔が熱くなってきた。けれど赤くなった頬は、赤や黄色の明るい電灯看板のおかげでカモフラージュされたようだ。

慌てて姿勢を正すと、彼は目で、付いて来い、と合図してくる。

「この辺は酔っ払いが多いから、女性の一人歩きは危ない」

「あ……」

繁華街は明るく大勢の人が行き来しているが、確かに飲み屋から千鳥足で出てくる人たちも少ない。

相変わらず会議中と変わらない無愛想な顔だし、言葉は簡潔だ。

けれども、紗奈を気遣ってくれているに違いなかった。  
(もう少し愛想良くしたら、すっごくモテると思うんだけど……)

さっきの店でも、何人もの女性にチラチラと見られていたし、少数だが勇氣ある女性たちに声も掛けられていた。

それでいて、どことなく声を掛けにくい雰囲気、この男は醸し出している。

(……まあ、一応勤めてる会社も知ってるし、送ってもらっても大丈夫かな?)

よく知らない男性に送ってもらうなんて、本来なら絶対にお断り、だ。

けれども、羽泉に他意はないと思え、好みの男性と話ができるかも、と珍しく下心も少し働いた。

駅までならすぐだし、彼は多分自分に気付いていない。

(一回会社で会っただけだし、直接話したこともないし……大丈夫。ここはお言葉に甘えよう)

「ありがとうございます」

「ああ」

軽く頭を下げて礼を言ったら、彼は簡潔に頷いた。そしてそのまま、ゆっくりと歩き出す。

(……やっぱり、思った通り背が高い……)

会社でもさっきの居酒屋でも彼の座った姿を見て、何となくそうかな、と想像していた。

低いヒールのミュールを履いた小柄な紗奈の隣に並ぶと、その腰骨の高さにびっくりだ。

わざとゆっくり歩いて、彼の後ろから、その長い脚と形のいいヒップを確認してしまう。

思わず憧れの溜息が、ホウツと口から漏れた。

一方彼は、紗奈が遅れがちなのにすぐに気付くと、こちらの歩幅に合わせてゆっくりと隣を歩き出した。

(歩幅合わせてくれている? 照れてる感じはないから、これは元々の性格なのね……)

そんなことを考えながらのんびり隣を歩いていると、気が付くとそこは駅前だった。

(あれ、もう着いちゃった……)

「あの、ありがとうございます」

改札口でもう一度お礼を言ったら、彼がじっと見つめてくる。え? と思う間もなく、彼は短く頷くとそのまま雑踏に消えていった。

無口な背中を見送った後、ちよつとほっこりした気分になる。

自然と微笑んで改札を潜り、その晩は上機嫌で帰路に着いた。

「失礼します。社長、そろそろお時間です」

「ああ、もうそんな時間か。じゃあちよつと行ってくる」

スケジュール通り専務と出掛ける社長を見送ると、紗奈は自分の机に向かった。

頼まれていた英訳、報告書のまとめ、書類の整理など、目の前には仕事が山のように積もっている。

「秘書室の杉野です。あの稟議書の件でメールを送りました」と、大事な用件はメールだけでなく

口頭でも伝えてから、うーんと大きく伸びをする。

(はあ、そろそろお昼かな？ 今日なんか、がつつり食べたい気分だわ)

とっさに、カツ丼が頭に浮かんだ紗奈は同僚に一言声を掛けてから、ズレそうになったメガネの縁を押し上げつつ立ち上がった。

(さてと、昨日は給料日だったし、今週末はドライブに出掛けよう！ 明日の天気とかも、お昼を食べながらチェックして……)

などと考えながら会社を出て、お気に入りの定食屋に向かって足取りも軽く歩く。すると突然、後ろから声を掛けられた。

「杉野さん！ ちょうどよかった。今日こそ昼一緒にどうですか？」

「……ごめんなさい、ちよつと目を通さなきゃならない書類があつて。また今度にも」

書類らしきものが覗いて膨れたバッグを認めた男性社員は、残念そうな顔をして、じゃあまた今度、と去っていく。

A 4 書類がスッポリ入る手提げバッグは、こういう時に使える便利な小道具だ。

何度も誘ってもらつて悪いとは思う。

だが、営業の彼は残念ながら好みのタイプではない。なので、誘いを全てやんわりと断っている。それに彼は、会社での紗奈しか知らない。

紺のピンストライプのすらつとしたスーツ姿に結び上げた髪形、ハープリムの上品な眼鏡をかけた紗奈は、誰が見ても「できる女」だ。

メイクもバッチリ、肌も輝いて、一見優等生タイプの美女である。

今、先週末に会った飲み会の若者の集団に紛れたら絶対浮くだろう。

素顔はベビーフェイスだが、実は紗奈はものすごく化粧映えのする顔だ。

この姿でいると店員の愛想が途端に良くなり、女性陣からはなぜか敬語で話しかけられてしまう。(……いいんだけどね、どつちも私だし……)

紗奈の視力は、眼鏡をかけなくてもいいのだが、仕事柄、こっちの方が箔が付いてちょうどいい。社用の顔は、月曜から金曜まで。土日は素顔で過ごしているのだが、最近ではドライブに出掛けるのを楽しみにしている。

(今週末のドライブは、どこに寄ろうかな?)

お気に入りのサイトで目ぼしいところをチェックして、「週末の天気、土曜晴れ」の予報に、ニマニマしながら昼食を食べ終える。そうして上機嫌で週末のプランを練りながらオフィスの廊下を歩く。

すると、見覚えのある一団がちよつと会議室に入つて行くところに行き合つた。

(ああ、午後一番の会議ね。今日こそ仕様書の草案、まとまるといいけど……)

そんなことを考えながら彼らを見送っていると、ひとときわ背の高い、スラリとした男性が紗奈に気付いた。目が合うと軽く、顎を引いて挨拶をしてくる。

(えっ？ 今のつて私に……だよな?)

彼は週末に居酒屋で会つたばかりの男性——羽泉だった。確か先週の会議では名前を紹介され

ただだけ。会社で会うのはまだ二回目のはず。なのに、あれだけの人数の出席者の中、発言もしなかった自分を覚えていたのだろうか？

(うそっ！ まさか、あの居酒屋で気付いた、ってことはないよね……？)

トンデモない予感が、頭をよぎる。

(ないっ、絶対ないっ、きつと偶然よ！ ぐうぜん……多分……きつと……)

急いで否定したものの、自信のない心の声は最後は消えそうになる。

スーツのよく似合う彼にかるうじて会釈を返したものの、まだパニックはおさまらない。

彼が気付いていませんように……と心の中で祈る紗奈であった。

◇ ◇ ◇

(あゝ、疲れた時の一杯は、身体に染みるわあ)

その週の金曜日の午後。紗奈は会社を出る前に、梅昆布茶を片手に書類チェックに励んでいた。

定時で上がる前に何としてもこれだけは、と処理すべきメールがゼロになった時、タイミング良くスマホのアラームが、ブーツと鳴った。

(やった、今日も持ち越しなし。さあ、帰ろう)

「お疲れ様です」

「杉野さん、お疲れ様です」

同僚たちの元気な声を後に会社を出ると、脇目も振らず金曜の夕方ラッシュの中を足早に進んでいく。

紗奈の会社は自社ビルだが、製品デモセンターも兼ねているので車を停める駐車場が完備されている。ギリギリ都内ではあるが、神奈川県駅の駅が最寄り駅だ。

駅のホームでブルルル、とドアが閉まる合図の音が鳴り響く中、小走りで電車に飛び乗った。

ヘッドフォンで音楽を聴いている学生たちやサラリーマンの群れに、割と小柄な紗奈の身体がギューギューと埋まる。人々の隙間から見える車窓には、自分の澄まし顔が映っていた。

——のだが、内心ではこれから始まる週末への期待感で、ニマニマである。

(ふう、今週も無事終わった)。さあ、早く帰って明日のドライブの準備をしなくっちゃ)

週末ドライブに憧れていた紗奈は、熱心にお金を貯めて何年か前に念願だった新車を購入した。

そして、愛車のために駐車場が近くにあるマンションにわざわざ引っ越したので。

それ以来、天気の良い給料日の週末は、一日中ドライブするのが紗奈の楽しみだった。

(今月は昼食代が結構浮いたから、お小遣いもあるし……)

夕食の残りをお弁当にして貯めたお金で、ドライブのついでに名物料理店などにも寄ることもあった。

車の維持のために、住むところはマンションとは名ばかりの年季の入った小さな建物にしたし、かつかつの生活だけど、それでもドライブはやめられない。

(芝桜ちゃん、待っててね。ふふふ……)

不気味な笑いを浮かべながら通い慣れた家路を、足取りも軽くコツコツと歩いていく。  
今週末は、芝桜を見に行く、と紗奈は決めていた。

目的の芝桜のある公園は、去年初めて立ち寄ったスポットだ。一面に咲き誇る芝桜は、少し離れて見るとまるで丘に花の絨毯を広げたようで、その幻想的な景色に心まで春の桜色に染まった。思いがけない贈り物を受け取ったような気持ちになれたのだ。

その日は、一日中ウキウキした気分で過ごしたのを今でも覚えている。

だから今年も花見を、何ヶ月も前から楽しみにしていた。

(ゴールデンウィークにかかる道が混雑するし、早めに観に行こう。今にも開花しそうな感じの、微妙に綻んだ蕾も可愛らしい……)

春が来た来た、と心の中で歌いながら、マンションの玄関ドアをガチャリと開けた。

チェーンロックをしっかりと掛け、靴を脱いでバッグを小さな折りたたみ机の上に置くと、ほっと一息つく。

今日も幸いなことに、問題のあるお隣さんには、遭遇しなかった。

紗奈の隣人は、何ヶ月か前に越してきたサラリーマンの中年男性だ。

いつだったか、平日の仕事帰りに初めて挨拶をされ、そのままマンションの廊下で延々と身の上話を語られた。初対面であるにもかかわらず、だ。

離婚したばかりで食事に困っているとボヤかれ、前の奥さんの愚痴を散々聞かされるともう早く解放されたくて、紗奈は丁寧に断って退散しようとした。すると、今度は、僕も杉野さんみたいなの

人に夕食作って欲しいなあ、とか言い出したのだ。寒気を感じ、挨拶もそこそこにドアを開けて退散したのだが、男はそれ以来、醤油がないなどと言っては紗奈の部屋のドアを叩いてくる。

今時醤油なんて隣人にもらうだろうかと思いつつも、毎週繰り返されるパターンに辟易して、三週目からは用意した醤油をすぐに渡すようにしている。

(なくなつた下着も、全部ベランダに干してあつた物だしっ)

下着が数枚見当たらなくなつても、最初は自分の勘違いかな? と大して気にしていなかった。

……が、さすがに同じことが続くと、これはもしかして? とようやく気付いた。外から見えないよう、物干しをベランダの端に置いていたのだが、建物が古い造りのため隣との防火壁に隙間があつて、手を伸ばせば取れないことはなかった。

今は家の中で洗濯物を干しているので、それ以降の被害はない。

だがさすがにこれは気味が悪いと思ひ、駐車場代が上がることもあつて、引っ越しを検討し始めたのだ。

この頃隣人に会わないことに内心ホッとしつつも、今日こそはネットで賃貸情報をチェックしようと思つている。

(ひとまずお腹も減つたし、ご飯にしよう)

コンビニ弁当を食べ、お風呂の後に毎日チェックしている経済番組を熱心に観ていると、ふああ、とつい大きな欠伸が漏れてしまう。

(今週も忙しかったし、明日は早起き。さあ、今日はもう寝ましよ……)

真つ暗な天井を眺めながら、<sup>まぶた</sup>瞼が重くなった頃、小さな忘れ物がひよっこりと頭に浮かんだ。  
(あつ、浮かれ過ぎて、貸賃情報チエックするの忘れてた。ま、いつか、明日明日……今更、スマホ  
いじるのもめんどくさいし……)

閉じていく瞼の重みに逆らえず、紗奈は久し振りにいい気分でぐっすりと眠った。

◇ ◇ ◇

そして待望の週末。

インターチェンジから高速に乗ると、紗奈は車の音楽のボリュームを上げた。今日の目的地はカーナビが要らないので、好きな曲をアナウンスに邪魔されずに楽しめる。

(はー、お天気もいいし、最っ高！)

久しぶりの遠乗り、胸が弾んで、流れる曲につられてうる覚えなサビ部分を、ラリラ、と適当に歌い出す。

こうしたドライブに紗奈がハマったのは、大学時代だ。

初めてできた彼氏が車好きで、時々ドライブデートをしたからだ。

大学のサークルが一緒だった元カレは、紗奈がお化粧するようになってからしばらくして、しつこいほど猛アタックしてきた男だ。それまで紗奈に興味など全然なかったくせに、見かけが変わった途端の強引な誘いに、初めはご冗談を、ぐらいにしか思っていなかった。

だが当初はうんざりしていた紗奈も、彼の情熱<sup>しつこ</sup>にほだされ、一回ぐらいいならデートしてみても——と流されたのが運の尽きだった。

元カレは、パツと見是好青年だったが、男としては最低な人間だったのだ。けれども、初めてのお付き合いで舞い上がってしまった紗奈は、彼の短所や嫌なことに目を瞑<sup>こ</sup>ってしまった。一年が過ぎた頃には、デートには色々などころに連れて行ってくれるまめな人だ、とさえ思うようになっていた。だけど普通の彼氏彼女の関係だと思っていたのは紗奈だけで、元カレには実は本命として狙っている子が別にいたのだ。

彼の就職が決まると、さっさとそちらに乗り換えられてしまい、気が付けば何と紗奈の方がその彼女から浮気相手扱いされていた。大学の帰り道で彼女に待ち伏せをされ、彼は迷惑してるから察しろだの、連絡するなだのいきなり言われた紗奈は、まさかの展開に混乱した。

『えっ、でも私、一年前から智樹<sup>とむき</sup>と付き合っ……』

『何言ってるのよ。私と智樹は入学直後からの仲なのよ。ずっと付き合ってくれて言われてたし、智樹が一流企業に就職できたって言うから、正式に付き合っ……』

『うそっ……そんなコトって……』

同じ学科だった彼女とは元カレも含めて共通の知り合いが多く、紗奈は大学時代の知り合いとはそれ以来一切連絡を取っていない。

それに結局元カレは、紗奈のお化粧をした時の見た目が気に入っていただけだった。紗奈自身はどうでもよかった、というか本音は素顔じゃ連れて歩くのはちょっと、だったらしい。

『講義のノート助かったし、課題手伝ってくれたし、紗奈はまあ嫌いじゃないけど』  
初めてを捧げた相手は二人が過ごした一年を、あつさりこの一言で片付けた。

まあ、よく考えてみたら、浮気相手扱いされた娘からも他の娘からも、彼宛ての電話やメールがしよっちゅうあった。友達と言うから信じていたけど、実は紗奈の方がメール一文で切られる立場だった——というよくある話だ。

当時は割とのんびりした性格の紗奈も、初めてできた彼にこんな振られ方をして、信じられないと傷つき、ドーンと落ち込んだ。

だけど幸か不幸か、その当時ちょうど紗奈は就職の時期を迎えていた。いつまでも引きずって、こんな男のために人生を棒に振るわけにはいかない。悔しい気持ちと理性を総動員して、これは経験値を積んだのよ、世の中あんな男だけじゃない、と思うことにしたのだ。

（失恋ぐらいみんな経験してる。タイミングはちよつと良くなかったけど、きつとりセットできるわ！）

泣きはらした目を誤魔化すために、ますますお化粧の腕に磨きがかかった。そして元カレからアプローチされた最初の頃に、どこか違うと感じていた心の声を無視したことを、猛省した。

（同じ失敗は繰り返さない。次の恋は絶対後悔しないように、感じたことは素直に信じよう……）  
それに、化粧を施すようになってからの周りの反応を見て、自分の見かけを変えることは武器になるとも悟ったのだ。こうして、紗奈は見事今の会社に就職できた。

その当時は一人暮らしを始めたばかりで、本当に余裕がなかった。学ぶことがいっぱいあったの

で、悲しかったことは忘れてしまえ、と仕事に打ち込めたのは幸이었다。  
だんだんと仕事に慣れていき、彼氏なんて気を使う存在がいなくてかえってよかったかも、と思うまでになっちゃったのだ。

そうして紗奈は多忙ながらもコツコツ努力を続け、鬱憤はせっせとお金を貯めることで紛らわした。そして二年前、憧れだったこの愛車をついに手に入れたのだ。

（元カレのことは痛かったけど、ドライブの魅力を知ることができたし）

お出掛けデートは本命との予行練習だったらしいが、車一つで今まで遠いと思っていた名所に気軽に行けるドライブに、紗奈は堪らなく魅了された。

過去は過去、と割り切れた今は、随分恋愛については慎重になったし、社内恋愛は絶対しないと決めている。こうして、ちよつぱり自分は強くなった、と過去を振り返った紗奈は、新芽がまばゆい山道を上機嫌に登っていく。

（あ、スポーツタイプNの赤だ。いいなあ、お金があつたら次は、絶対あんな車よね……）

見事なハンドルさばきでカーブを曲がって下りてくる憧れの車に、一瞬気を取られるものの、すぐに意識を目の前の道に集中する。こんな風にスポーツカーやサンルーフを開けたクーペなど、色々なタイプの車をドライブ中に見かけるのもお楽しみの一つだ。

一体この都会のどこに隠れていたのか、と見ているだけでも楽しくなってくる。

同じドライブサイトを参考にしているのか、たまに一日何度か同じ車を見かけることもある。袖振り合うも多生の縁ではないが、親切なおばさんからドライブに快適なルートを教えてもらったこ

ともある。

この芝桜もおすすめされて、フラリと立ち寄ったスポットの一つだった。  
(うわあ、なんか去年より、綺麗さが増しているような……)

陽気な春の日差しに包まれて、自然の美しさを存分に堪能すると、高揚した気分のまま駐車場に戻って来た。帰りはどこかに寄ろうかな？ など考えながら車に向かって歩いてみると、見覚えのある赤い車が目に留まる。

(あれ？ 人気なんだなあ、この車、最近随分見かけるよね……)

ドライブでいろんなところを回っていると、自然と人気の車種が目につくようになる。この高級スポーツカーも最近人気のようだ。前面のフォルムも後面のスポイラーもカッコイイ、と足を止めてじっくり眺めてしまう。

スポーツカーは見ていただけでも眼福だわ……と見事なカーブを描く車体に見惚れていた紗奈は、運転席に人が乗っていることに、やっと気が付いた。

(あつ、まずい、ちょっと不審だったかな)

すっかり夢中になって、口を開けて見惚れてしまっていた。

運転席から人が出て来る気配がして、ジロジロ見えて気を悪くさせたのなら大変と、慌てて自分の車の方向に歩き出す。

「おい、アンタ、一人なのか？」

「えっ？」

何となく聞き覚えのある、バリトンより心持ち低い声。思わず振り向けば、赤のスポーツカーに寄りかかり、シャツとジーンズをモデルのように着こなした黒髪の男性がじつとこちらを見つめていた。

(えっ!? 見間違いないよね？ どうしてこの男が、こんなところに……?)

「……羽泉、さん？」

「名前覚えてたんだな。下の名前は、翔だ。杉野さん、アンタの下の名前は？」

「へ？ 名前？ 私の名前は紗奈、ですけど」

「ああ、やつぱり。居酒屋にいたの、アンタだよな？ 後で名前確認したら、会社で紹介された名前と違ったから驚いたんだが」

(あーっ、これはマズイ！ 新卒に紛れて飲み会に参加する、変な女だと思われたかも……)

会社の取引相手に、不信任を与えてしまったのかもしれない。

「あの！ あの時急病の妹の代わりで……」

「そうか、身内の代わりだったか。名字が一緒だったからそうじゃないかと思った」

(ふう、よかった、セーフ、セーフ。不審者扱いはされてないみたい……それにしても……)

「よく、あの時、私だって分かりましたね。妹の同級生は誰一人気が付かなかったんですけど」

「俺は一度顔を見れば分かる。妹さんの顔も知らない」

「あの、あんなこと、毎回しているわけではなくてですね……」

誤解を解こうと早口になってしまった紗奈に、彼は面白そうに笑って答える。

「ああ、ずいぶん緊張してたな。居心地悪そうだった」

（えっ、嘘、笑った！ すごい、かつわいい！）

笑顔が想像していたよりもずっと爽やかで、おそろく年上なのに可愛いと思ってしまう。

つられて紗奈も、彼にニッコリ笑いかけた。

「そんなに分かりやすく態度に出てました？ 自分では上手く隠してたつもりなんですけど……」

「ああ、他に気付いた人はいない。アンタ、上手く笑顔で誤魔化してたな」

「よかった。結奈に知られたらまた怒られちゃう。それでなくても名刺の一つももらってこないなんて、つて拗ねられたのに……」

「ははは、面白い妹さんだな」

（わあ、笑顔全開だ……）

思ってもみなかった羽泉の気さくな態度と笑顔に、紗奈の胸は高鳴った。

（ほんっと、イケメンだわ、この人。こんな風に笑って話しかけられたら、ドキドキしちゃう）

モデルばりの容姿に思わず見惚れる紗奈を、彼は笑顔で誘ってきた。

「なあ、アンタ、一人なのか？ この後暇なら俺に付き合わないか？」

「えっ？」

「ドライブが好きなんだろ？ 美味しいコーヒーとケーキ奢るから、ちょっと付き合え」

「ケーキ……」

イケメンと二人で美味しいケーキ。

普段は警戒心バリバリの紗奈だが、今はスッピンに近いし、会社の取引相手だし、第一、彼から変な電波はまるで感じられない。

彼の会議中の姿に惹かれていたこともあって、素直に頷いた。

もちろんケーキは美味しいボーナスだ。

「よし、アンタの車、これだよな。カーナビにこの住所入れられるか？ 多分ここからだど二十分

ぐらいだ。その店で落ち合おう」

そう言っつて、紗奈の車まで歩いて送ってくれた彼は、紗奈がカーナビをセットしたのを確かめると、念のためとスマホの番号交換をして「じゃあ後で」と頷いて自分の車に向かった。

カーナビが示した行き先はカフェである。何だか思っていたのと随分違うドライブになってきたが、これもまあ、ドライブの醍醐味だ。

彼とこうして偶然出会うのは、これで二度目。

不思議な巡り合わせが、吉と出るか凶と出るか。

気持ちちは自然と弾んでいて、自分はこの思い掛けない出会いをラッキーだと感じているんだ、と自覚してしまった。そんな心を勇気付けるように、流れている曲のメロディーを口ずさむ。そしてカーナビのお姉さんの指示通りに車を走らせると、美味しいコーヒーあります、と書かれた看板が見えてきた。

（あらまあ、可愛いカフェ。緑が綺麗……）

緑の溪谷に羽泉の赤い車が映えて、綺麗なコントラストを生み出している。

車に寄りかかって待っていた彼は、車から降りてきた紗奈を見ると、上半身を起こして、ふっと笑った。

「迷子にならなかったか？」

「カーナビがあるのに、なぜ迷子に？」

彼の気さくな態度と笑顔につられて、思わず言い返してしまう。

「そうだな。俺はコーヒーが飲みたいんだが、約束通り、何でも注文していいぞ」

そんな紗奈の態度に、なぜか彼は嬉しそうに答える。

（あ、やっぱり素敵な笑顔……）

最初に声を掛けられた時も、車に寄りかかる彼を見て、雑誌に載っているモデルのようだと思った。

こうしてじっくり見ていると、男らしく精神な顔を無性にカメラに収めたくなくなる。紗奈は思わず一步下がり、「ねえねえ、ちょっと」と言いながらスマホを取り出した。

初めは驚いたように目を見張った彼も、紗奈の目的を察すると面白そうに、ニヤツと笑いかけ始める。

「なんだ？ 俺の写真が欲しいのか？ 高くつくぞ」

「何言ってるのよ。もうちょっと、車に寄りかかって、そうそう、はい笑って」

（嫌がってない。よかった……）

なぜ急に、こんな強引なことを思いついたのか？ 自分でも不思議に思いながらも、パシャ、と

撮った画面を一緒に確かめる。

「わあ、あなたって、ホント綺麗に写るのね。まるでモデルみたい……」

「俺だけ撮ってもしょうがないだろ、ほらこっちに來い」

「へっ？」

肩に大きな手が回ったと思うと、二人の目の前に彼のスマホが。

……そのまま、パシャ、と二人の写真を撮られていた。

（びっくりした、急に接近するから。あ、でもタイミング的に……）

「ちよっと、今の絶対、私、変顔してた！」

「おあいこだ。どれどれ……別に普通に可愛いが？」

「え!? ……なんか恥ずかしい、ねえ、これは消去！」

スマホ画面を覗くと、彼は笑っているのに自分は目を見開いたびっくり顔になっていた。どうしても納得がいけないと、彼の手からスマホをもぎ取ろうと試みたが、悲しいかな身長差……いくら背伸びしても全然届かない。

「だめだ、俺はこれがいんだ」

ほら、行くぞ、と促されて紗奈はうんと低く唸ってから、ハツとした。

（私、取引先の人に何じゃやれるの？ っていうか敬語、敬語忘れてる！）

「あの、羽泉さん、先程は失礼しました」

焦りまくって取り繕った紗奈に、羽泉は思いつ切り不満顔だ。

「なんだ、いきなり改まって。翔でいい。それにここは会社じゃないんだ、さっきみたいなタメ口がいい」

「えっ？ いくら何でも年上の男性を、それも会社繋がりつなの人を呼び捨てするのは、今更だけど、無理な気が……」

オンオフが結構激しい紗奈ではあったが、いくら会社ではないとはいえ、考え込んでしまう。

「俺はコーヒー、紗奈は何にする？」

「へっ、えっ？ あの、私はこの手作り紅茶と、今日のおすすめチーズケーキにしていますか？」

「却下、やり直し。敬語なし」

「ええっ！」

「やり直し」

「えっと、羽泉さん、あの……」

「翔、だ」

「……翔、紅茶とケーキお願いします」

「五十点」

紗奈が渋々言うと、羽泉——翔はまだちょっと不満げながらも店員を呼んでくれる。

「すみません、オリジナルブレンドコーヒーと、手作り紅茶のケーキセット、チーズケーキで」

「はい、畏まりました」

（……呼び捨てにしるって、本当に？）

穏やかな目で自分を眺めるこの男性は、会議中も飲み屋でも無愛想の一言に尽きた男と、本当に同一人物なのだろうか？

（この人、プライベートは、会社とまったく違うんじゃない……）

でもきつと、これもこの人の素なんだな、と何となく嬉しく思った。

紗奈だって、今の自分は会社にいる時の自分と全然違う。

作っているわけではなく、あっちの紗奈は会社バージョンというだけだ。

だけど理性的に考えてしまう紗奈は、仕事関係と私生活をミックスした交遊など、今まではなかった。勢いで付いてきてしまったものの、ボーダーラインがあやふやなこの状況に、どうしているか分からない。

胸はドキドキするし、気持ちはずわすわするし、態度はマゴマゴしてしまう。

何だか落ち着かないなあ、と周りをぐるっと見渡すと、そこで初めて自分たちがテラスの端にある、渓谷の絶景を見下ろす眺めの良いテーブルに着いたことに気付いた。

「わあ、すごい！ 綺麗……」

空気が幾分いくぶんヒンヤリしており、涼しいそよ風が首筋を撫でていく。

「後で沢まで下りてみるか？」

「えっ、下りて行けるんですか？」

「……却下、やり直し」

「へ？ ……あの、下りていいの？」

「駐車場からぐるっと回れる」

「ぜひ、ぜひ行ってみてください」

「……その、言葉遣いを改めるなら、連れて行ってやる」

「ええ!? ……分かった。翔、沢に下りてみたい」

「よし、靴は大丈夫か？」

「大丈夫、ドライブにヒールのある靴なんか履いてこないわ」

「そうか」

彼は注文したコーヒーを美味しそうに飲みながら、リラックスした様子で長い脚を組み、目を見つめて答えてくれる。

相変わらず返事は簡潔だが、ぶっきらぼうな感じはしない。

会社や飲み屋で見た時とは違って、長い手足を気持ち良さそうに伸ばした姿は、とても落ち着いて見える。綺麗な指が組まれた手は男らしいのにどこか優美で、形のいい顎を手の甲にのせて、のんびり外の絶景を楽しんでいる。

艶々の髪や長い睫毛は、午後の柔らかい日差しに照らされて透き通って見えた。

彼の整った顔をこんな間近で見ていると、さらに胸の鼓動が高まってくる。コーヒーカップに目を落とす姿も憂いを帯びたように見えて、その優雅な姿に、なんて綺麗な男なんだろう、と見惚れてしまう。

こうして向かい合って座っていると、彼は会社関係者、という意識がだんだん薄れてきた。

代わりに、長い間埃を被っていたはずのトキメキが、鮮明に蘇ってくる。

（うわあ、こんな感覚、久しぶり……）

胸がトクン、トクンとしながらも、じきに普通の口調でしゃべれるようになった。

「そういえば、紗奈はこの間の会議には、どうして出なかったんだ？」

「ああ、私は秘書室勤務なのよ。前に出席した時は、報告のために臨時で拝聴させてもらったの」

「なるほど、随分熱心にノートを取ってるから、てっきり若手の育成かと思った」

「残念ながら、専門外よ」

「まあ、俺もそれほど詳しいわけではないがな」

「えっ、そうなの？ てっきりガチガチのエンジニアだと思った……」

「はは、そうか。なら俺のハッターも効果があつたわけだ」

（確かに、専門のエンジニアの意見を聞いてはいたけど、どちらかと言うと会議が脱線するたびに軌道修正してるほうが多かったっけ……）

そして、双方の妥協点を上手く探り、最後は方針をきちっと纏めていた。

（つまりは管理職ってこと？ エンジニアチーフってそういう意味なのかな？）

こんなに若いのに、やはりすごい人だ。

こうして初めて二人きりで話をしてみて、それが分かるような気がした。何だか上手い具合に乗せられてるし、いつの間にか名前呼びを許している。

無愛想な人かな？　と思っていたが、無駄な話はしないだけで、決して無口ではないらしい。必要なことは全て丁寧に答えてくれるし、彼からもどんどん質問してくる。

(なるほど、意味のないおしゃべりや、興味のないことへは寡黙になるのね)

こうして二人でしゃべっていると、彼の人となりが垣間見えてきた。

黙っていても堂々としているので、気が弱い人は威圧感を覚えるかもしれないが、味方であれば、彼に任せておけば大丈夫——そんな信頼感を抱くだろう。

そして、仕事に関しては妥協を許さない厳しい目。

この間の報告書の疑問点をさりげなく質問してみると、しつかり答えが返って来た。

「ああ、それは製品番号での検索から……」と、紗奈にも分かるように、専門用語を使わずに噛み砕いて説明してくれる。彼の説明を聞いて、自分の解釈が合っていたことに安心した。

緑の渓谷をのんびりと眺めながら、景色にそぐわないビジネス談話が弾む。

(やっぱり、ビジネスに関してはすごく詳しい……何だか楽しいな)

気が緩んだ紗奈がケーキを食べ終わると、気さくに「行くか？」と沢への散歩に誘われた。

「今日の芝桜、綺麗だったな」

「はあ、もう最っ高だった。綻びかけの蕾と、ちょうど咲いたばかりの桜でピンクに染まって……早めに来てよかったわ」

「初めてか？」

「今日で二回目。ちよつと時間はかかるけど首都高で朝早く来れば、そんなに混まないし」

「そうか。ドライブ、好きなんだな」

「ええ、結構驚かれるんだけど、運転は苦にならないの。いろんなところに行けるし」

「そうだな。紗奈、こつちだ、足元気を付けるよ」

さりげなく手を差し出されたが、慣れていないので一瞬躊躇してしまった。

だが、「ほら、ぼうつとすると危ないぞ」と注意を促された際に、さつと手を掴まれる。

(きゃあ、手が！)

もう何年も前のことなのに、元カレにひどい扱いをされたせいで、少々男性不信気味なのだ。

だけど、翔に手を取られても、いつも男性に触れられると身体を走る悪寒は感じない。

(あれ？　私、この男のこと、警戒してないんだ。こんなイケメンなのに……)

顔のいい男性はたいいていの場合、いやに女性を軽く扱うか、馴れ馴れしい人が多いと思うことがしょっちゅうだったのに、彼はそんな様子がまったくない。

それに彼は、紗奈が薄化粧でも全然態度が変わらない。元カレとは大違いだ。

比べてはいけない、と思いつつも、翔の態度は気取らず誠実だと紗奈には思えた。

この男とは、沈黙も気にならないくらい、一緒にいて安心できる……

翔とは今日初めてまともな会話を交わしたはずなのに、ずっと前からの知り合いのように、隣にいてとても居心地がいい。

心からリラックスできる雰囲気、気軽なおしゃべり、そして二人の間に時々流れる心地よい沈黙をも楽しんで、都内とは思えない静かな森林を歩く。

沢に下りて清流をバックに写真を撮ってもらおうと、ますます打ち解けた気分になり、一緒に駐車場に帰って来た。

「紗奈、来週暇か？ 海にドライブに行こうと思ってたんだが、一緒に来るか？ 近場だがな」

「えっ、いいの？ あの、本当に？」

翔にまた誘われた！

その事実以内心の驚きを隠せない。

「ああ、多分午後からになるが、来週土曜でいいか？」

「うん。ええと、誘ってくれてありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、また来週な」

翔は優しく微笑み、「詳しい時間はまた連絡する」と相変わらず簡潔な言葉を残して、車に戻っていく。

そのまま車に乗り込むと、ゆっくりバックをしながら車を出す翔を、紗奈は軽く手を振って見送った。翔の車が見えなくなると、唇から溜息が漏れる。

（ふう、男の人と二人きりでこんな風に過ごしたのって何年ぶりだろ？ ドキドキしたけど、なんか思ったより嫌じゃなかったな）

ほんの少しだけど、自分の男性に対する見方も変わったような気がする。

帰りの運転中も、素晴らしかった芝桜より、翔と過ごした短い時間の、その楽しかった記憶だけがふわふわと頭に浮かんでくる。

自然と口元が緩んで、ニマニマ笑いが止まらないまま紗奈は帰路に就いた。

ふわふわした気分はその日の晩まで続いていた。

（来週かあ、晴れるといいなあ）

落ち着かない気持ちのままシャワーを浴びて、パジャマに着替える。

（あ！ そうだ、今日こそは忘れないうちにと）

浮かれるあまり、また忘れるところだった。今週のおすすめ物件は……と、ゴロンと寝転んだベッドの中で、賃貸情報をスマホでチェックしていく。

次はセキュリティがしっかりしたところがいいな、と条件を頭の中で整理してみる。

（幸い会社は都心から外れているし、同じ路線ならもうちよっと遠くても大丈夫かな？ ちよっどいい物件、なかなかないよね……）

熟考しているとだんだん眠たくなってきた。寝落ちする前に手を伸ばしてスマホを戻すと、馴染んだシャンプーの匂いのするベッドに滑り込む。

半開きの眼で天井を見つめていると、来週末、晴れるといいな……とつい考えてしまう。

今までになく今日の出会いに浮かれて、ウキウキと楽しみにしている自分がいる。

翔に掴まれた手を何気なく眺めていると、何だかまたドキドキしてきた。

咄嗟にベッド脇からスマホを取り、翔の笑顔が写った写真をじっくりと眺めてしまう。

（もう、いい加減大人なんだから、十代の頃みたいにそんなはしゃがないの！）

自分自身に言い聞かせても、次の瞬間には口元が緩ゆるんでしまっていた。

（あんなカッコいい人なんだし……社交辞令かもしれないんだから、ダメになってもがっかりしないようにしよう……）

スマホを、カタン、と元の場所に戻し、胸がキュンとする自分にすっかり予防線を張っておくのも忘れない。

（……あつ、しまった、返事する前に彼女がいるか聞いておけばよかった……前回の二の舞だけは、絶対避けたい。今度会った時にはちゃんと聞かなきゃ）

そろそろ寝よう、と自然と瞼まぶたに浮かぶ笑った顔に、お休みの挨拶あいさつをする。

紗奈はその晩、騒さわめく胸中を宥なだめて、ようやく穏やかに眠りについた。

## 2 セカンドギア

水曜日のお昼休み。今日は絶対忙しくなるからと、紗奈はお弁当を自席で勢いよく食べていた。

その間も、次々に仕事の確認が入る。

「すまんが、ドイツ支社の生産需要見込みの報告書、次の会議までに頼む」

「営業に回した来期の生産目標数値表のコピー、どうなった？」

夕食の残りとお茶を持参してきて正解だった。このままだと忙しくて販売機にジュースを買いに

行く暇もない。お箸をせっせと動かし、最後にお茶をすすする。

（さてと、充電完了）

そうしてさっさとランチを済ますと、机でパソコンと睨めっこしながら、卓上の電話に手を伸ばす。海外支社との電話を続けながら受話器を耳と肩の間に挟みこみ、パソコンで直接報告書の修正をする。

『……ありがとう。それではこの報告書を翻訳して、今度の会議の資料として提出します』

『よろしく、リードタイムの短縮たっくに繋がればいいんだけど。じゃあまた』

（はあ、この件は見通しがついた。次、次つと……）

毎年大忙しのこの時期は、ドラマの続きとドライブを唯一の楽しみに乗り越えてきた。だが、今日の紗奈は一味違って、鬼気迫るものがあつた。

（約束の時間までに一日家に帰って、化粧を直したい！）

そう、紗奈のこの仕事への打ち込みようは、全て翔から届いた一通のメッセージに起因するものだったのだ。

午前中、翔からメッセージが届いた時には、本当に驚いた。

『今晩空いてるか？ たまたま約束がキャンセルになったから、夕食を一緒にどうだ？』

（ええっ！ 今晩つてっ）

用件だけの、翔らしい簡潔なメッセージだった。

週の半ばの夜に予定などあるわけもなく、心待ちにしていた土曜の約束よりも早く会える、とも

ちろんOKしたものの……

翔に会うのならば、何となくだが作り込んだ会社仕様のこの顔より、素顔に近い状態で接したかった。翔との食事を楽しみにしているくせに、気合を入れてお化粧をしない、という矛盾に自分でも変だと思ってしまう。

もちろん、この会社用の顔の方が男性受けすることは分かっている。

紗奈だって、どうせなら可愛く思われたい。

(だけど後でガツカリされるのは……もつと嫌だわ)

憧れに近い今の気持ちなら、たとえ翔の態度が変わっても、落ち込みはするだろうがダメージは少ないはず。

……とはいえ、たったひとときを一緒に過ごしただけなのに、すでに翔に入れ込みかけているという自覚はある。少なくとも傷つくのが怖いと感じてしまうほどには、だ。

彼は週末のベビーフェイスを見ても驚いてはいなかった。だからこそ、彼に夢中になる前に線引きしたい気持ちと、態度を変えなかったことに期待したい気持ちの間で、揺れている。

そして今、この二つの矛盾した心が、紗奈を馬車馬のような勢いで仕事に駆り立てているのだ。

その気迫に満ちた姿に、周りは話しかけてはいけない空気を感じ取っているらしい。見えないねじり鉢巻を頭に巻いて、黙々と仕事に励む紗奈の邪魔をしないように、抜き足差し足で後ろの通路を通り抜ける同僚の姿も見受けられる。

電話に応答する声や書類をめくる音、パソコンのキーボードを打つ音で常に賑やかな秘書室で、

紗奈の机の周りだけは、静寂な湖のようにシーンと静まりかえっている。

(ようし、次、どうか電話に捕まりませんように……)

機械のようにせつせと仕事を片付けていく紗奈がミラクルを願った甲斐あって、その日の午後は電話が鳴らず、集中して仕事ができた。

終業時間を五分過ぎた頃には粗方メドがつき、よし、さあ帰るぞ、と勢いよく席を立った。

「お疲れ様です。お先に失礼」

「お疲れ様です」

後輩たちの尊敬の念が混じる声を後に、ヒールの音も高く颯爽と会社を出る。

ところが駅の方角に向けて歩き出した途端に、今、一番会いたくない相手に捕まってしまった。

「杉野さん！ 待って、よかったら今晚食事でもどうですか？」

(うわぁ、なんてついてない……)

「ごめんなさい、今日は先約があつて」

こんな受け答えをする時間も惜しくらい自分は急いでいるのだが、営業男はそんなことなどお構いなしだ。

疑わしそくに紗奈を見て、問い詰めてくる。

「……水曜の夜にですか？」

「ええ。急いでるから失礼します」

こんなに断ってるんだから、少しは空気を読んでばかりに歩き出そうとしたのだが……

「ちょっと待って下さい。食事くらい一回付き合ってくれても……いい店知ってるんですよ。奢りますから、さあ」

いきなり腕をグイッと引つ張られて、身体中をプワツと悪寒が駆け巡った。咄嗟に半歩後ろに下がって、やっぱり相手から遠ざかる。

この自分が誘ってるんだから、という強引さが元カレと重なって、紗奈はこの営業男が苦手だった。顔がわりかしいこともこの男は自分でよく分かっているようで、しょっちゅうわざとらしく髪を掻き上げるのも、受け付けない。

それに、常に押し付けがましい印象を受けてしまう。

何だろう？ どうしても、好きになれない……ぶっちゃけ紗奈のタイプではないのだ。

(翔も強引だけど、なんか絶対違う……)

この男は元カレと同類——紗奈の本能がそう告げている。

「申し訳ないんですけど、今日は本当に先約があるんです」

「じゃあ、その相手にここで電話してみして下さいよ。できないなら付き合ってもらいますよ」

(ハア、この人、ホントしつこいし、めんどくさい)

どうしてここまで、相手の意思を無視できるのだろう。

だんだんと苛立ちが募ってくる。

(営業はこのくらいの押しがないと、仕事が取れないのかもしれない……けど、私にとっては迷惑でしかないわ！)

家ではのんびりしたい紗奈とは、絶対合いそうにない。

無視しようとも思ったが、会社の同僚なのだから確執が残るようなやり方はダメだと考え直した。

「ちょっと待ってて下さい。相手も仕事かもしれないので、メッセージで聞いてからにします」

「ええ、どうぞ」

連絡を取れるものなら取ってみろ、と言わんばかりの男の態度に腹を立てつつ、スマホで翔に『今、話せる？』とメッセージを送る。

すると、まもなくスマホの着信音が鳴り出した。

『紗奈？ どうした、都合がつかないか？』

「違うの、同僚に食事に誘われたんだけど、今夜は先約があると言っても信じてもらえなくて」

『何？ 困っているのか？ 相手はそこに居るのか？』

「ええ」

『電話を代われ。相手と話してやる』

「えっ？ でも……」

『大丈夫だ。ほら、代われ』

初めて電話越しに聞く翔の低い声にドキドキしながら、大丈夫かしら？ と思いつつ営業男にスマホを差し出した。

「彼が話したいそうです」

「えっ……？」

営業男は困惑しながらも、「もしもし」とちよつと虚勢を張つたような態度で、電話に出た。そんな男を横目に、紗奈は翔の落ち着いた声を聞いた安心感で、ふう、と一息つく。

「そうです……分かりました」

最後は消え入るような声を出した営業男のセリフに、紗奈はハッと顔を上げた。

（あ、終わった？）

「杉野さん、電話」

突き返すようにスマホを渡され、どうなったんだろう？ と思いつつも出てみる。

「もしもし、翔？」

『そこで十分ほど待つとけ。今行く』

「えっ、ちよつと翔？ 何？」

聞き返した時にはもうすでに通話は切れていた。

（そこで待つとけって、どういうこと？ そこって、ここよね？ 会社のビルの真ん前の道路脇……）

脇……）

「杉野さん、今の電話の彼と付き合ってるって本当ですか？ 写真とかありますか？」

ふん、と鼻息も荒く、営業男は聞いてきた。

（え、付き合ってる？ あ、もしかしてそう言つて助けてくれたのかな）

「写真ですか？ ありますけど……はい、これ彼の写真」

真紅の愛車に寄りかかる翔の写真を見せた途端、スマホを覗き込んだ男の顔が、はつきりと引き

つた。どうやらこの男は紗奈の相手が自分よりいい男なわけがないと決めてかかっていたようで、スマホの画面越しに微笑む翔を見て、明らかに動揺している。

翔と付き合ってるのか、という質問には、わざと答えない。

紗奈には相手の勘違いを否定して、せつかく手に入れた今の有利な状況をひっくり返す気はさらさらなかった。

「……これって、タイプNですか？」

「ええ、彼の車です」

一目見て言い当てたということは、この男も車に詳しいのだろう。

自分だって、ローンは嫌だったから、何年も掛けてせっせとお金を貯めて、やっと今の車を買えたのだ。とことん値段比べをしたおかげで、翔の車がどれくらいするのかも、もちろん分かっている。

紗奈の車の何倍も高い翔の車は、憧れはしても気軽には買えない車だ。

言葉に詰まった相手との会話が途切れると、遠いところで車のクラクションが鳴る音が聞こえる。

（どうか、顔見知りに、見つかりませんように……）

一刻も早く、ここから立ち去りたい。

ジリジリと過ぎる時間に焦れながらも我慢して待っていると、少しして、ドロン、ドルルと、スポーツカー独特の低いエンジン音が近づいてくるのが聞こえた。

音につられて道路を見ると、冴えた銀色のスポーツカーが横をゆっくりと通り過ぎていくところ

だった。

「すげ、スーパーカーだ！」

営業男の目は車に釘付けた。

（うわあ、すごい、本物を見たのは初めて……）

一台でマンションが買えてしまうほどの、最高クラスの国産スポーツカーだ。

紗奈たちだけでなく、道を行き交う人々が注目する中、その車は会社の前の道路脇に止まった。

（あれ？ あの、見覚えのある背中……）

「翔！」

「えっ、まさか……」

運転席から降りてくる背の高いシルエットは、銀色のスポーツカーに相応しい、すらりとした姿の水も滴るいい男だ。こちらに向き直った今日の翔は、この前の会議で見かけた時のような、みんなと同じスーツ姿ではない。

三つ揃いのいかにも高級なスーツを身に纏い、長い脚を動かして優雅にこちらに向かって来る。

（う……っわ、すごい、カッコいい！ それに、なんかこういう高級スーツ、着慣れてる？ って

いうか、なぜこの間のスーツより、こっちの方を当たり前に着こなしてるように見えるの？）

恐るべしイケメン効果！

非日常の世界を背負った翔は、ビル前にいる紗奈たちを認めると、ツカツカと近寄ってくる。ポカンと開いた口を慌てて閉じて、チラリと横を見ると、営業男の顔はポカンの表情で固まっていた。

「紗奈、待ったか？ で、俺に会いたっていうのは君か？」

髪もきっちりまとめて、堂々と歩道を歩いてくるその姿は、上品な服を着こなしていても野獣のようなオーラを纏っている。上背のある翔に迫力のある目で見下ろされて、開いた口を慌てて閉めた営業男は、タジタジとしながらも答える。

「ええっと、そうです。あの、杉野さんの彼氏さんって……」

「ああ、これは失礼、私、羽泉と申します。紗奈がいつもお世話になってます」

どこから見ても文句なしのいい男である翔と並ぶと、営業男は態度はもちろん、容姿の点でもかなり見劣りする。

「は、あの、いえ……自分はこれで、失礼します。あの、杉野さん、お疲れ様ですー」

翔を呼び出すほど自分に自信があったはずの営業男は、比べられるのは勘弁とばかりにその場から逃げ出した。

「では、行こうか、紗奈」

そんな男を尻目に、翔は紗奈の腰をさりげなく抱いて、車に向かう。

紗奈は、しつこかった男から解放されたものの、ほっと息をつく間もなかった。

（腰、腰に翔の手が……）

いきなりの密着に、心臓がドキンと大きく跳ね上がる。

翔の手に抱かれている腰のあたりに、意識が集中してしまう。

営業男に見せつけるためだとしても、これはよっぽど親しい仲でないと紗奈基準では完全にアウ

トの振る舞いだ。

（普通は知り合って間もない関係なら、しょっちゅう身体に触れないよね？ 確か、付き合いだして間もなくは肩に手、深い関係になったら腰、じゃなかったっけ？）

恋愛市場からあまりにも遠ざかっていたせいで、自分の知らない間に世の中の常識が変わってしまっただろうか？

（……まあ、翔だし、嫌な感じしないし……いいかな。むしろこんな親密なエスコートされるの、初めてで嬉しいかも……）

翔は丁寧に車の助手席のドアを開けて、満足げな様子で待っている。

翔の接近に上機嫌な自分に驚きながらも、翔がドアを開けてくれた助手席に小さな声でお礼を言いつて乗り込んだ。

ボタン、とドアが閉まると同時に、翔と新車の匂いがフワッと漂ってきた。

「悪いな。一旦家に帰って堅苦しくない服に着替えるつもりだったんだが、今日は役員会議でな」

「ふふふ、助かった。翔、ありがとう」

「どういたしまして。さて、約束の時間まではまだ大分あるが、お腹の具合はどうだ？」

「結構空いたかも。残業したくなかったから、気合入れて片したし」

「はは、そうか。俺のためだと、自惚れていいか？」

悪戯っぽく聞いてくる顔を見て、紗奈もちよつとはにかんでしまった。

「……分かっているくせに」

「紗奈の口から聞きたいんだ」

「当たり前でしょ、楽しみにしてたんだから」

「そうか、俺も急なキャンセルを、誘えるチャンスだと思っただぞ」

「え！ あの……誘ってくれてありがとう。本当に今日は助かったわ。先約がなかったら危うく強引に連れて行かれるところだった」

「もう大丈夫だ。あの男にも、彼氏のいる女性に手を出さない常識はあるだろう」

「ふふ、そうね」

紗奈は確信していた。

あの営業男は、翔の姿を見た以上、今後紗奈を誘うなどという無謀な真似は、絶対しないだろう。先程と打って変わって紗奈を優しい目で見つめてくる翔は、本気を出すとかなり近寄りやすい雰囲気になっていた。

（なるほど、会議の時は結構抑えていたのね。だから無愛想に見えたのか……）

鋭い目をした翔の本気がチラリと垣間見えて、あの無愛想な顔の意味がやっと分かった気がした。

「ねえ、翔、さっき本気で脅したでしょう。口調は丁寧だったけど、目が笑ってなかったわよ」

「バレたか。まあ、アレだ、紗奈が本気で困っているのが分かったからな」

「アレは大抵の人が萎縮しちゃうわよ」

「そうなのか？ まあ、友人にも注意されて、気を付けてはいるんだがな。紗奈は俺が怖いかな？」

「怖い？ 翔を怖いと思ったことはないわよ。可愛いと思ったことはあっても」